

---

# あの、そこ私の席なのですが

山野みどり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの、そこ私の席なのですが

### 【Nコード】

N9779Y

### 【作者名】

山野みどり

### 【あらすじ】

偶然、自分の席に座るクラスメイトを目撃してしまった加奈。その日以降、彼の数々の行為に振り回される羽目に。 無口美形ワンコに溺愛される平凡少女のお話です

これは一体……？

慌ただしく教室の扉を開けた桑原加奈は、飛び込んできた光景にピシリと硬直した。はずんでいた息も眼前のありさまに一時停止する。

えーっと、今は三時間目と四時間目の間の休み時間でー。美紀と次の移動教室へと向かう途中にノートを間違えた事に気づいて、時間も残り少ないから慌てて一人引き返してきたんだけど……。教室に残っていたのはクラスメイトの男子生徒二人。

「あー……」

立ち尽くす加奈を見て、気まずげに顔を引きつらせる松本君と……気のせいではなければ加奈の席に座り、加奈の机にしがみついているもう一人。

「……」

うん。窓際後ろから二番目。そこは紛れもなく私の席、だよな？  
こちらに後頭部を向けているその人物の頭はなぜか、上下に激しく揺れていて。よくよく見やれば頬を机に擦りつけて……擦り、付け

「荒川、荒川」

絶句する加奈に背を向けて、誰かさんの肩を揺する松本君……っ

て荒川君！？

「……なんだ、邪魔するな」

顔も上げず不機嫌そうに答える……うん、荒川君の声ですね。と  
いうか邪魔ってなんですか。

「いやいや、ほら、見られちゃったから」

「だから邪魔す……なに？」

のっそりと松本君を見上げた荒川君の視線が動き、扉の前で往生  
したままの加奈とぶつかる。

切れ長の一重の目を常よりも僅かに見開き、こちらを凝視する荒  
川君。その両手は未だ加奈の机の両端をしかと握りしめたままで。  
心なしか片頬が赤く見えるのは擦り過……いや、目の錯覚だよね。  
てか、ほんとに何してるのさ荒川君。人の席で。

「「「……」」」

三人の間に、とてつもなく重い空気が流れる。  
と、その静寂を破り松本君が口を開いた。

「あー桑原さん、どしたの？」

「……それはこっちの台詞なんだけど」

「……だよーあはは、はは」

松本君のわざとらしい笑いが響く中、荒川君はこちらをじっと見  
つめたまま動かない。露骨なまでのその視線になんだか加奈の方  
が気まずくて、ぐるぐると忙しなく視線を巡らせる。

「あ、やばいー次始まっちゃうよー」

唐突に気まずすぎる空気を払拭するよう、松本君が白々しさも全開の口調で言うと、荒川君の腕を掴み、へばり付いている机から力ずくで立ち上がらせた。ガタタと椅子が派手に動く。

そのままぐいぐいと荒川君を伴って歩きだす。加奈の横をそくさとして通り過ぎ

「桑原さんも急いで急いでー、遅れるよ」

大きな身体をズルズルと引きずるようにして出て行っていた。その間も荒川君の視線は加奈から外れないままで。

「……なんだったの」

どつと疲れを感じながら、ノートを取り出すために机に向かう。

一応、我が机に何かされてないかもチェックするためにも。

結局、次の授業へは少し遅れてしまった。いや、だってほら、異常がないか念入りに調べてたら……ねえ。すみませんと頭を下げた時も足早に席に向かう時も、とある方向から重い視線を感じるような……気のせいよね。

教室での席がそのまま反映されているので、窓際後ろから二番目

の席へと腰を下ろす。

「あーそれじゃあ教科書23ページの……」

教師の言うままにページを開くも、正直内容なんてちつとも頭に入ってこない。思い浮かぶのは先程の出来事ばかりで。

結局あの二人、というか荒川君は私の机で何をしてたんだろう。何やら机に頬擦りでもしてたように見えただけ……いやいや、そんな馬鹿な。

先ほどの二人の姿を脳裏に思い浮かべる。

松本啓介君。ふわふわの茶色い癖っ毛に、垂れ目が甘い顔立ちのモテ男。飄々とした性格で、男女問わず広く浅く人付き合いしてる感じ。私も二年になって同じクラスになる前から知ってたし。

何気ない一言がすごく巧いんだよね、この人。なんでもない感じで自分の望むペースに場を持ってくし……絶対腹黒いと内心思ってたんだけど、さっきはなんか苦労人ぽかったなあ。日頃纏ってる余裕オーラもなんか消えかけてたし……実はあんなだったのか？

そして問題の、荒川祐也君。この人も話題に事欠さない人だよね、女子が三、四人集まればかなりの確率で話題に挙がるし。

癖のない黒髪に切長の瞳の冷徹美形なモテモテ男。常に無表情なその顔は凄まじく整っていて、一切の隙がない感じ。何に対しても無関心な印象があるし、実際そうなんだと思う。いつもダルそうにしてるし口数も少ないし……美形だから許されてる所も多々あると思う。幼馴染だっていう松本君以外と関わってる所もあんまり見たことないし。あ、ちよつと男子と話すくらいか。

だから間違ってもあんな、へ、変態行為をするタイプじゃない。今しがたの光景を思い浮かべ、知らず知らず教科書的一部分を睨

みつける。

校内一のモテ男だよ？いや他高の娘も荒川君見たさに押しかけてくるんだから、それはそれはモテる男なんだよ。そんな人がなんだってあんな事を……。

三秒目が合ったら惚れさせるなんて噂さえあるんだから、女には不自由してないだろうし。まあ告白してきた女の子は全員ばつさり断ってるらしいけど……っってイタいいタいいタいい。何だか痛い。体の右側が凄まじく痛い。

ちなみに

私、窓際後ろから二番目。

荒川君、廊下側の一番後ろ。

おまけで松本君、私と同じ窓際の一の前。

まさかと思いつつ、チラリと右斜め後ろを向く……っつつ！

しゅばばっと黒板に向き直る。けどその焦点なんて合っていない。め、目、目が合った。一番奥の人と（……荒川君なんだけど）目が合っちゃったよ！！

「……」

恐る恐る確認してみる。嫌がる首を無理やり回して……ええええっ。

私、何かしましたでしょうか。

「であるからしてだな、質量をここに」

あと10分、あと10分。チクチク刺さる視線に耐えること30分。心なしかお腹も痛くなってきた。要らぬ刺激を与えてしまいそうで、身じろぐ事すらままならない。静かな教室に響く先生の声も全て頭を素通りしていくだけだ。あまりに進みの遅い時計にお門違いな怒りすら湧いてくる。

「あゝ次、問2と問3を」

うう、早く終わっ

「荒川、桑原。前に出て解いてみる」

はいいいい！？一気に顔が引きつるのが分かる。

「お前ら、ちーっとも集中してないからな」

化学担当の山下先生が、半笑いで言ってくるけど……目がマジです。どうやらお怒りのご様子です。

「ほらほら、早く前に出るー」

うつつ、ツイてない。泣く泣くノートを片手に立ち上がる。ガタツともう一人も立ち上がる音が聞こえる。こうなったら、さっさと終わらせて席に戻ろう。幸いなことに答えは分かっているし、予習しといてよかった。



周りを見ないように足早に黒板へと向かう、松本君の傍を通る時はちよびつと息をつめてしまったけど平常心平常心。えーと、チヨークチヨーク……………え？

ピシッと教室の空気が固まったような気がする。というのも全て、私のすぐ横にいらっしやる方のせいなのですが。

〈回想〉

えーと、チヨークチヨーク。あ、あつた……………え？  
私がチヨークを掴んで3秒後、私の手に一回り大きな手が重なりまして。横を見やれば荒川君。あ、なるほど。荒川君もチヨークを探してたんですね。にしては3秒のズレがあつたような気がします。では、コレは譲りますよ。私は他のを、他のを……………

〈回想終了〉

あの、手を放してください。

## 1（後書き）

お気に入り登録、ありがとうございます  
感想いただけると嬉しいです（〇〇だったの一言で構いませんので）

「……………あー荒川？どうしたんだ？」

静まり返った教室に、山下先生の声がむなしく響く。

先生っ、もつと言ってやってくださいっ！さつきからこの人、明らかにおかしいんです！援護射撃を求めて振り返るうにも顔が上げられない。至近距離から視線を感じ、背中を冷たい汗が伝い落ちる。う、動けない。これから私にどうしろと……………っ。

俯いた視線の先に、私の手をつしりと掴んでいる手が映る。自分の手を小さいと思ったことなど一度もなかったが、こうして眺めるとなんとひ弱なことかっ。

ちよつと力を入れてみるも全く動かない。

チヨークが欲しいなら譲るからっ、まず手を離してえええ。

ぐつぐつと静かな攻防を繰り返す。遠慮なしの渾身の力でも解けない手には、もはや閉口するしかない。そうしている間にも徐々に、教室のあちこちから興奮したひそひそ声が生じはじめた。

……………どう見られてるんだろうか、この状況は。今後の日常生活を思うと意識が遠のきそうになる。

皆さん、しっかり見てくださいね？上にあるのが荒川君の手ですかね！？荒川君に恋する女が血迷った末の行為とかじゃないからね！？そんな噂が流れてもしたら私、私っ。

ふいにガタツと誰かが椅子から立ち上がる音がした。ほとんど縋るような思いで振り返る。

「荒川、荒川」

予想どおりそれは松本君で。彼はゆつくりと歩み寄ってきた。

……どこかで見たような動きです。どこだっけ。なんか「どうどう」とか言ってるし。

テレビで観た獰猛な肉食動物をなだめる飼育員のように見えるのは、私だけでしょうか。

「あーごめんね、桑原さん。どうもコイツさっきので振りきっちゃったみたいで」

苦笑しながら、何やら訳の分からない事を言う松本君。  
フリキッタって何ですか？

「ほら荒川、お前もいい加減にしとけよ、授業中だぞ？」

ポンポン、と自分より僅かに長身の荒川君の肩を叩く松本君。  
そういう問題でもない気がします。救いの手が現れたことにほっとします。それに合わせて恐る恐る荒川君へと視線を向けると、私より20センチは高いであろう彼とばっちり目が合いました。

「……」

なんでしょう、握られた手に更に力が入ったような……。

「あー……お前ら、とりあえず席戻れ」

山下先生の疲れたような声に、ギギギと握ったまんまだった  
チヨークを放す。一文字だって書いてやしないのにこんなに手が真  
っ白に、まあ不思議フッフ。逃避の一つでもしないとやってられな  
い。

ふらふら席に戻ろうとする精神的には瀕死の重体の私に更に追い打  
ちをかけるのはこの男。

……荒川君や、私や席に戻るんだよ。手を放しておくれ。

でもね、この短い時間で私は悟ったよ。普通の人にはこんな事態を  
乗り切るのは不可能なんだ。ここは無理をせず飼育員さんにお願  
い……って松本君！なにさっさと戻ってんのさ！この人を置いていかな  
いでっ責任もって連れて行って下さい！

着席した松本君の色素の薄い茶色の目をみつめて懇願する。

ん？みたいな顔してるけどあなた、私の言いたいこと位分かるでし  
よ！？腹黒なんだからっ！必死な私にっこり笑いかける松も

不意に強く手を引かれた。

え、え、混乱状態の中、足がもつれないように歩きだす。いきなり  
何です、か……ってひいいいっ。し、視線が、視線が刺さる。あえ  
て見ないふりをしていましたけど、クラス中の視線がグサグサ刺さ  
ってきます。更に、ひそひそと聞こえてくるのはどう聞いても非好

意的な内容です。

……終わった。

いっそ気を失いたくなる中、自分の席へとたどり着く。

……荒川君の席はこの列じゃないんですけど。なんですか？わざわざ連れてきてくれたんですか、手を繋いで、そうですか……うつつ。ひいっ座ります！椅子を引いてくれなくても座りますから！

荒川君もどうぞ自分の席に戻ってくださいっつ。

……！？

……なぜ手を握っているのとは逆の手で頭を撫でるのです、か

そのまま、クラスメイトがガン見する中、チャイムが鳴るまで撫で続けられた。

……席に戻ってください。

「……じゃあ今日はここまでな」

チャイムの後、山下先生が力なく告げるも誰一人、前を見ようとしない。私の頭を撫でくり回しているこの人も、手を止めようとしな。か、顔が上げられない……って心なしに触れてくる範囲が広がってきているような気が……っ。

「ハア……とりあえず、荒川は席に戻れや」

ほら日直、号令ー、心底疲れたというように山下先生が言い放つ。その声に、ぐいぐいと触れていた手をそっと離れた荒川君は、じい

いっと私を見つめた後、くるりと踵を返し席へと戻って行った。

起立、という日直の声にヨロヨロと立ち上がりながら、私は平穏な生活の終わりを悟った。

に、逃げたい……

うつむいていても感じる視線の山、山、山。授業が終わったにも関わらず誰も教室に戻ろうとしない。驚愕、好奇、嫉妬、あらゆる意味を含んだそれらが私に集中している。

……普通これらは犯人、というか不審な行動を起こした荒川君の方にいくんじゃないんですかね？なぜ被害者側の私が槍玉に挙がっているんでしょうか。どう見てもクラスの九割の視線が私の方に集まっています。女子からはかなり敵意を持ったものを感じますし……やはりの人気の差なんでしょうか、無情です。

そんな状況下にもかかわらず、あろうことか山下先生は早々に出て行ってしまった。去り際「無駄に疲れたな」なんて呟きが聞こえましたけど……先生？以前から放任主義だとは知ってましたが、これはあんまりです。

徐々に大きくなっていくざわめきに心折れそうになりながら、ぎこちなく動き出す。

向かうは斜め前の席に座る友人、長谷川美紀だ。華奢な背中からは私を巻き込むオーラがばしばし出ていたが構わずその細い手首を鷲掴み、有無を言わず足早に特別教室を脱出した。



昼休みを迎えざわめく廊下を、二人早足に進む。

「はあ……あんた何したのよ」

面倒くさげに問いかけてくる美紀に

「……何もしてない」

精神的な疲れを感じながら力なく答える。

「ほんとに？」

整った顔を訝しげに歪める美紀に、再度うなづく。

なにか理由があるのなら私が教えてほしいくらいだよ……思い当たるのは人の机で何かしてる荒川君に遭遇した事だけど、あれは

「あんた気付いてなかっただろうけど、三谷とか凄かったわよ」  
記憶を辿っていると、隣からの笑いを含んだ声に遮られた。

「え？」

「あ、やっぱり気付いてなかったのね」

はあ。そりや自分の状況にいつぱいいつぱいで、周りを見る余裕なんてとてもとても。ミタニ、というと三谷蘭子さん？荒川君の事が好、きだと公言している……ひいつ！？

「なんか般若みたくなってたわよ」

硬直する私に構う事無く、クスクスと軽く告げる美紀に理不尽な怒りを覚えそうになる。

笑いごとじゃないよ！あ、あの三谷さんに目を付けられでもしたらどうすんのさっ！ああなんだか息が苦しくなってきた……。

目の前が暗くなりかけたが「置いてくわよ」という無慈悲な美紀の一言に、慌てて後を追ったのだった。

「あ、二人とも遅かったね！実験でも長引いたの？」

なんとか辿り着いた教室には、いつも一緒にお昼を食べる隣のクラスの友人、石森さくらが待っていてくれた。常のように私の席に座って待っているさくら。一時間前に見た光景とは雲泥の差だ。

「お腹すいたね」

弁当を広げながら笑う温かな笑顔に抱きつきたくなるがそんな時間はない。いつもはこの教室で食べているけど今日はとても無理だ。たちまち針ネズミになってしまう。

不思議そうなさくらに謝り、弁当を包みなおしてもらい各々弁当を手に教室を出る。不思議がりながらも素直に従ってくれるさくら。

「ごめん、今は説明する時間も惜しいんだ。美紀はなにやらめんど臭そうだが気にしない。親友の一大事でしょうが！」

めったに利用する事のない食堂へと落ち着き、やっと一息つく。

「加奈ちゃん、どうしたの？」

こくりんと可愛らしく首を傾げるさくらに癒されつつ、口を開こうとしたその時、食堂の空気が波打った。そこかしこから小さく嬉しげな声が上がる。それにひっかかるものを感じ、ふと視線を巡らすと、食堂の入り口から此方に歩いてくる二人の人物、が……！？

カキンと固まるこちらを余所に、その非常に目立つ二人組は私たちと同じテーブルに腰を下ろした。

……え？

確かにこの食堂のテーブルは六人掛けだから、まだまだ余裕ありますけど。でも周りを見て下さい？まだまだ無人のテーブルが山ほどありますからっ。ほら周りの皆さんもなにやら不審がってますよ？

固まったままの私に、心底メンドーと言いた気な美紀、不思議そ

うなさくら。

「あーごめん、俺らもいいかな？」

キラキラ笑顔で聞いてくる松本君。

だけどその笑みはもう私には胡散臭いものにしか見えないっ。

「えーっと？」

さくらが此方にくりくりお目々で尋ねてくるが、答えてあげられる余裕はない。

なぜ元凶がここにっ……しかもまたも私の顔を凝視してるし、近い近い近過ぎる！！

さくら      空席      松本君

テーブル

美紀      私      荒川君

ガタタツと椅子を動かして更に距離を縮めようとする荒川君。  
ひいっ！？美紀っ美紀っもつとそっちに詰めて！当たってる当たってるからっ肩腕足が当たってますから！

食堂の空気が凍りつくのを感じる。

信じられないと此方を凝視する目、目、目。あああ本当に倒れてしまいそうです。

「……とりあえず食べましょ」

淡々とした美紀の声に気を落ち着かせ、お弁当の包みに手をかける。簡単な結び目なのに異様に時間がかかる、手が震えているのは気のせいです……って

「加奈？」

動かない私を呼ぶ美紀の声が聞こえるけど、反応できない。

ええつと……え……？

今朝、母が作ってくれたお弁当を包んだのは私。きちんとお箸も入れた。紅いウサギが可愛い箸入れを……なのに、なぜっ割りばしが私の包みの中にいつ！？

ばっ、反射的に右隣を見る。

私の三倍はある大きなお弁当を広げている人物の右手には……お、お、お前かあつっ！！

荒川君の右手、その大きな手が持つには違和感バリバリの紅いお箸。ちっちゃなウサギが三匹プリントされてるそれは……私のですよね？

ナゼドウシテナンノタメニ……背中が寒くなってきました、そこから目が離せません。

というか何時私のお箸が、この方の手に渡ったのでしょうか……登校して、机の横にお弁当を入った手提げかばんを掛けて、それから四時限目の移動教室まで私は席を離れなかった、箸……うん。

となると、やはりあの時……なのでしょうか。人の机に座りこみ、

荷物を漁って箸を入れ替

「……荒川、あんたさあ」

左隣の美紀も、私の異常の原因に気付いた様で溜め息を吐くと、呆れを含んだ声で続ける。

「それ。その箸、加奈のでしょ。なーんであんたが持つてるのよ」

ああ美紀さん美紀さん美紀美紀さん！よくぞ聞いて下さったつ。そうなんだよ、この人ちよつと変なんだよ。無視してたけど、この状況下でさえ足が何か変な動きしてるしっなんでそんな擦り付けるように動いてるんですかつ！

ヨ、ヨシ。美紀にだけ任せるわけにはいかない。私も言わなきゃ……女には言わなきゃいけない時があるんだつ。幸い此処には美紀もさくらも、胡散臭いけど松本君だっている！

ぐつ、目に力を入れて荒川君を見据える。相変わらず目が合っけど……負けない！

「あ、ありゃかわくん！！」

ひああああ緊張で口が回ってない。負けてる、最初からなんか負けてるよ私つ。

ふうーふうー落ち着け、分は明らかにこちらにあるんだからっ！

って荒川君、なにテーブルにつつ伏してるんですかつ。私はあなたに言いたい事があるんですよ……って荒川君の大きな体が小刻みに震えてるような。うわっ反動でテーブルまで揺れてるっ、ああお弁当が落ち

「……かわいい」

はい……？今なにか仰いましたか？目の前のお弁当を押さえたまま右下を向く。

机に伏せたまま、此方を見上げる荒川君と目が合う。

「かわいい……加奈」

はいはいはいはい！？

返り討ちです。

意気込んで問い詰めようとした所、見事に返り討ちにされました。

カワイイ、カナって聞こえたんですが……可愛い？カナとはもしかしくても私の事でしょうか。下の名前で呼ばれるほど親しくはないというかわりも無いというか。

茫然としたまま、ぐるぐると思いを巡らせる。

ぼけつと見つめる先、のっそりと荒川君が上半身を起こし、手を動かす。そのままお弁当の上に乗っている私の手を丁寧な仕草で外し……って！

「な、な、な」

なに自然な感じで盗っていつてるんですか！それは私のですよつ。大体あなた、自分のお弁当があるじゃないですか、なに人のまで欲しがってるんですかつ。

いそいそと（……うん、目の錯覚かな）蓋を開けようとする（……うきうきオーラが出ているような）荒川君の腕を掴んで止める。

「……？」

何故止めるのか分からないとでも言いたげに見つめられ、思わずたじろぐ。



で、でもでもっそれは私のですからっ、この場合おかしいのは荒川君の方っ。

ひるまず腕を掴んだままでいると、不意に荒川君が頷いた。  
分かってくれたのかと涙が出そうにな

「半分」

「……え？」

「半分こ」

いやいやいやいやそういう事じゃないんだよ。おかしいでしょう、明らかに。誰かこの人に常識を教えてあげてください。私の手にはおえません。

助けを求めて振り返る。

真っ直ぐお弁当を見つめ、黙々と箸を口に運ぶ美紀。

ミニトマト片手にモゴモゴと口を動かすさくら。

目線が合っとなぁに？と傾げられたお顔が可愛いです。

紙パックコーヒー牛乳のストローを銜えたまま、生温かい目でこちらを見ている松本君。

「……もう半分こでもなんでもいいから、はやく食べなさいよ」  
こちらを見もせず投げやりに言う美紀に、なんだか泣きたくなり  
ました。

暫し黄昏ている内に、荒川君は勝手に蓋を開け終えていた。しか  
も気付けば私の右手は荒川君の左手と繋がれている……あれ？

しかもなんか指、絡まってるんですけど。これは俗に言う恋人繋  
ぎってやつなんじゃ……もう言葉ありません。

荒川君はそのまま、私のお弁当を凝視していた。  
ナ、ナニ？ 気になり私も覗き込む。

えーと今日のお弁当の中身は

ご飯

卵焼き

鳥の唐揚げ

ほうれん草のお浸し

冷凍食品のヒジキ

変わらず美味しそうです、ありがとうございます。

でも、どうみても一人分しかないよね。半分こってどうするつも  
りなんだろ。

「加奈の？」

「え？」

「加奈の手作り？」

「え、いやお母さん、だけど」

朝に弱い私にそんな時間はありません。

「……そう」

心なし残念そうに呟いた荒川君。  
だが次には、深く頷くと

「でも、加奈の」

なにやら自信満々に断言し、右手の箸で卵焼きを掴も……ってちよつと待てい！

「そのお箸っ……私の、だよね」

それは私のでしょ！荒川君はこの取り換えた割りばしを使ってよっ。

「……だめ？」

……だめって何ですか。

「……だめです」

当然じゃないですか。なに勝手な事言ってるんですか。  
さあ返せと左手をつき出す。

「……」

なんか、むううう理不尽な顔してますけど駄目ですよ？こんな勝手が通ると思、ってちよっ……！？

ひよい、パク、もぐもぐ。

……食べたっ。人のお箸で卵焼き食べたよこの人っ。

「ん」

はあっ！？いやいやいや、なに「はい返す」みたいに差し出して

るんですか。むりムリ無理、本気で無理。あなた使ったじゃないですかつ！

「……もういいです。割りばしで食べるんで、手、離してください……」

なんか疲れちゃったな、ほんと……左手に割りばしを持ち、ぼんやりしてると

「松本」

荒川君が一言、松本君の名前を読んだ。

すると、向かいの席の松本君が、ちよつとごめんね、桑原さん、なんて言いながら手を伸ばしてきて……あつという間に割りばしを割った。

「はい、どうぞ」

「……」

……これはお礼を言うべき、なの？  
もはや何が正しいのか分からなくなる。深く考えたら負けのような気がするし。

「……ドウモ」

「いえいえドイツマシテ」

とにかくこのままじゃ昼抜きになってしまつ。午後を空きつ腹で過ごすのは嫌だ。

「荒川君、手」

唐揚げを口に運ぶ荒川君を呼ぶ。

「私、右利きだから」

それに、荒川君はああと頷き私の右手を離す。そして当たり前のように私の左手を握った。

……うん。とりあえず今はご飯だ。こゝは……ん

「ん、うまい」

「……」

「うまい」

「……」

「んまい」

「……」

あのう半分こという話は、どうなったんでしょうか。

みるみる減っていく中身を、割りばし片手に呆然と見つめる。あ、

あ、あ、ご飯が唐揚げが卵焼きがあ……。

ムグムグ……ゴクン

ふうと満足そうに一息ついた荒川君が

「ん」

半分、と私の方にお弁当箱を差し出してきた。

「……」

ほつれん草とヒジキが僅かに残っている。

「……」

頬を引きつらせながら、チラッと横目で確認してみる。

「……？」

食べないの？みたいな顔してる。  
無言の私を見かねたのか

「荒川あ、いくら桑原さんが小柄だからってさあ、それじゃどう見ても足りないって」

美味しそうな焼きそばパンにかぶりついている松本君が、呆れたように告げる。

すると荒川君は不思議そうに私を見つめ、問いかけてきた。

「……足りない？」

「……つつつ、足りないに決まってるでしょっ!!」

瞬間、私の中の何かがキレた。その綺麗な顔を、強く睨みつける。  
私のお弁当なのに……っ

空腹と、訳の分からない事ばかりする荒川君への苛立ちが爆発し、  
ジワリと瞳の奥が熱くなる。

沸き上がる衝動のままに、繋がれたままだった左手をぶんつと振り払う。

そんな私に、心底驚きましたみたいな顔で固まった荒川君は、硬直後、わたたと自分のお弁当に手を伸ばしパカッと開けると、ずいっと差し出してきた。

大きな体に比例した大きなお弁当。

ご飯

肉、肉、肉!!

隅っこに申し訳程度にキャベツの千切り

「……」

無言でお弁当を見つめる私に

「全部、やる」

「.....」

「だから.....っ」

「.....」

「.....っ」

.....え？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9779y/>

---

あの、そこ私の席なのですが

2012年1月14日19時54分発行